

よくいうなら、やっぱり自分の考え、曲げたくない。

悪くいうなら、それ以外は考えられなかった。

語り手 大井 峻輔（高校八期生 私立中学校教員）

聞き手 山林 心太郎

―それじゃあ、よろしくお願いします。

お願いします。

―さっそくなんですけど、教師目指してるって言ってたんですけど。教師っていう仕事を最初に志したっていうか、意識したタイミングっていうのはどのタイミングだったんですか？

自分自身としてはなんとなく、中学生くらいの時にイメージが湧くくらいには思っていたんですけど。自分、中学から立守で、そのときの担任の先生との出会いが大きくて。

―今はここ（立守）にはいらつしやらない？

はい、そうです。

―その先生に心動かされたのはなんでんですか？

これは本来あんまりよくないのかもしれないですけど、「言うこと聞きなさい」というような先生が多い中で。

―はい。

「それが本当に正しいのか考えようよ」みたいなこととか。

―なるほどなるほど。

自分が特に印象に残っているのは、始業の挨拶のときにブレザー着なさいっていうルールがあったんですよ。

―えーそうなんですか。

多分、今はないですよ？

―そうですね。

微妙な季節のときなんかは、みんな脱いでるのに号令のときだけ着るみたいな。でも、その人の授業のときは「もうやらんでいい、やらんでいい。意味ないから」

―はいはいはいはい。

だからその、先生の言うこと聞くのが当たり前だし、一方的に全部頼呑みにしていた自分っていうのがいたんです。でもそういうことがあって、そういう自分を変えたっていうのが一つかなと。

―なるほど、なるほど。

あと印象に残っているのは二年生のとき研修旅行みたいなのがあったんですけど、当時は広島。一泊二日で行ったんですけど。そんなときも学年集会みたいなのを開いて。

―へえー。

持ち物何持って行きたい？みたいな。それでみんな（生徒）が手を上げて。こうこうこういう理由で持って行きたいですって。で、それに対して先生が反対する。そんな感じの会話みたいなのをすごく大切にしています。

―はい。

当然みんな携帯持って行きたいとか、当時はガラケーかな。あと当時やたら音楽聴くためにiPod（音楽プレイヤー）持って行きたいとか。例えばiPod持って行きたいやったら戦争の話とかを聞いて気持ち沈んでしまったときに音楽が聴きたいって言ったんです。でも、先生はそれやったら先生の指示聞き流す可能性があるんじゃないとか。

―確かにそうですね。

なんかそういうことを企画されたりとか、やっぱりそういうことがあったりして。なんというか、自分自身、普通に勉強してぼーっと過ごしているだけみたいなのという自分ではなくて、そこを変えることができたといいか。もうちょっと、主体的に。

―はい。

生きていくとかそういうことを学んだ一年間だったな思ってた。それがあって、やっぱりこの先生は他の先生とは違ってたっていうのがあって。うーん。自分も同じように一石投じられるんじゃないかみたいなそういうこともあって、教員になろうと思いました。すいません、長々と。

―いいえ。その先生独自の企画だったんですかね。なんか僕の学校だったらすでに決められてて、講義の時間もないっていうか。

うーん。

―学年全体っていうか？

うん。学年全体でそういうことをして。それを先生たちで会議して、最終的にこれは許可が出たよみたいな。例えば、大半はダメだったんだけど、カメラなら持っていていいよとか。ゲームとかやったらこういうの（ゲーム機）はあかんけど、トランプとかなら持っていていいよってなったり。うーん。そんなふうな感じになったかなと思います。

―その経験を受けて、今実際に何を意識してるというか。

正直最近結構忙しくもなったりしてて、そういうところとかも忘れつつあるんやけども。自分はこういうことを大事にしていると、そういうことは生徒に話すようにしてます。

―すい。

あとは、やっぱり生徒の意見とかをできるだけききたいとは思ってますね。

―なるほど。

例えば自分まさに今、中学校二年生の担任してるんですけど。年度当初に去年は日直どんなふうにしてたとか。

―はいはい。

あるいはこういふときってどうしてた？とかを聞いたりとか。去年クラスがバラバラだったので、このクラスではこうしてたみたいなのを集めたりして、じゃあこのクラスではどうしていかっていかってのを決めたりだとか。

―あーはいはいはいはい。

なんかそう。人の話を聞くっていうのは一つ意識してる場所ですね。

―なるほど。なかなかこう、うん。中学の頃から教員を志していたっていう話があったんですけど、教員以外の道っていうのは考えたことなかったですか？

全く考えていなかったわけではないです。自分どちらかというと内気な性格で。自分自身言い方悪いけど、インキヤって言われるタイプの人間やったから。

―うんうん。

やっぱり人との関わり方っていうのも上手ではなかったたので。自分ほんまに先生に向いてるんかなって思うこともあった。

―はいはいはい。

そんなこともあったりしたんやけども、でもやっぱり自分のやりたいことよく言うならやっぱり自分の考えを曲げたくないっていうのがあつ

たのと、悪く言うならそれ以外のことは考えられなかったというか。

—あーはい。なるほど。

考えるのもめんどくさがってたのかもしれないけれども、それ以外はもうないなって言う風に自分の中で決めてました。

—なるほど。フロンティアコースって言ってたじゃないですか。その当時もう受験クラスというか。

うん、今と変わらないような感じ。ただ当時はフロンティアじゃなくて、フロンティアサイエンスって名前で。

—だから部活とかもやってなかったみたいな感じですかね？

まあというか。自分自身そんなにスポーツとかも得意ではなかったの
で。

—はいはい。

そんな何かやりたいことがあったわけではないかなっていう。

—大阪市立大学理学部数学科って、ほんまに数学ばかりしてるところ
すか？

そうっすね。いわゆるなんか数学ってどんなイメージですか？何をす
るイメージというか？

—そうですね。ほんまに数学数学してて、問題ばかり解きまくってる
んかなってイメージはありますね。

そうね。でもたぶん計算とかそういうイメージがあったりすると思っ
ねんけど。数学の本当の専門の勉強って。

—はい。

計算とかほぼなくて、証明ばかりで、しかもなんか何を言っ
て、大学はもう本当に勉強についていけなかったですね。正直。

—高校でやってるレベルの問題の大学版みたいな感じですか？

いやもうなんかまるつきり変わると言っても過言ではないくらいのも
のでした。

—めっちゃ難しそうですね。僕数学めっちゃ苦手なんで。

おー。微分積分って言われてもまだわからんね？

—そうですね。全然わかんないっす。僕は昔から中学の時点で数学NG
みたいなぐらい苦手に思ってしまうっていうか。先生は結構もう中学の
ときからずっと数学は好きだったんですか？

そうですね。数学は結構点数が取れた方だったので。小学校のときも
割と算数が得意だったかな。国語とかよりも自分でまあ理系かなとは思
ってました。

—中学から立守やったら、中学受験をしたわけじゃないですか。それっ
て親からの勧めなのか、先生が自分自身で立守に行きたいみたいな？

まあ正直なところ親からの勧めではあったんやけれども、地元の中学
はちよつと行きたくなかったなあって思ってた。やんちゃな子が多かつ
たし、自分自身地元が隣の町なんですけど。

—ほかの学校と比べて立守のいいところというか、どういう生徒が多い
とかありますか？

やっぱり一つはすごくいろんな意味でも自由度の高い学校だって言
うのはすごく思ってた。ちよつと噂では聞いたんやけど、校則もだいぶ
ガラッと変わってとか。なんかそういう新しいこととかどんどんチャレ
ンジしていこうみたいな、なんかそういう風習があるのはすごくいいと
ころだなと。

—昔はほぼ生徒主体じゃなかったんですか？

うーん。当時の良さにしても今の良さにしても、またちよつとやっぱ

り違う部分とかはあるかなとは思うんやけれども、やっぱりそのひとは生徒主体で何かしようみたいなのは、そういう考えがある先生とかもちよつとずつ増えてきてなんか学校全体がそういう雰囲気になりつつあるな、っていうのは昔から感じてたって感じです。

―なるほど。もし先生が小学校の頃に戻るとするじゃないですか。そうしたらもう一回同じ道を辿りたいと思いますか？

そうですね。そういういろんな経験させてもらったっていう意味でも、立守に来てよかったなって思ってるし、多分もう一回来るなって思います。むしろ逆にもう自分から受験させてほしいぐらいの勢いで言うんじゃないかなと思います。

―そんなにも思入れがあるんですね。教師をして一番嬉しかったなという瞬間ありますか？

教師の魅力

一番心に残ってるのは、立守で高校三年生の担任をした時の話なんですけど、卒業式退場するとき。みんなまあ合唱して、クラスごとに降りて退場するときにちよつとサプライズみたいなのを全クラスやって。これうちなかったらきついぞと思いついて、自分の番になった時にちゃんと事前に準備してきてくれて。ちよつと凝ったことをしてくれて（笑）。

―ええ。

みんな紙を持って一人ずつ、「ありがとう、大好き」って書かれてて。

―めっちゃ感動しますね。泣かなかったですか？

なんかぐつと、なんというかそのときは泣かなかったですけど、翌日

卒業式終わって、次の日から全然仕事もなくて部活くらいだったんですけど。もう次の日起きて、何も手につかないというか家でしばらく引きこもってるぐらいのなんか抜け落ちて。自分の中で終わっちゃったんなみみたいな。

―はいはい。そのときの教え子とかと会うことありますか？

私の教え子が一番大きくて大学三年生くらいなんです。その子たちが、バイトしてるところには行ったりとか。後は大学の学園祭とかも極力行くようにしてて。

―ええ。

そのときに生徒にまあ会えたらいいくらいの気持ちで行くんですけど。会えたら、こんな風に頑張ってるというかっていう話とかもしたりして。基本インスタとかフォローきたら卒業生とか通すので。

―そうなんですか。

だからそこで（インスタグラム）、こんなこと頑張ってるとか見れるのも良いし、大学のサークルでなんか「こんな発表します」みたいなのがあった時とかもちよつと見に行ったりしますし。

―じゃあ、結構生徒の活躍っていうのは楽しみにしてますね。その仕事してる中で、難しさを感じる瞬間っていうのもあるんですね？

それは授業してて？

―授業とか、先生としてとか。

やつぱりなんというか、まさに今久々に担任も始まって。色々やることはあるんやけども。例えば喧嘩が起きたときにどういうふうにお互いの言い分を聞こうとか。どんな風に話を持っていこうとか。それはすごく起こるたびにちよつとね、頭を悩ませたりもするし。誰と誰が喧嘩したみたいな（ことが起こった）その翌日に、変な時間に目が覚め

てそのこと（生徒の喧嘩）を思い出して二度寝できなくなってみたいな。

―考えすぎてしまうというか？

ああどうしようって（笑）。これがなんか取り返しのつかないいいことだったら。

―ネガティブに考えてしまうというか？

そうですね。

―生徒たちの悩みをうまく解決できないときに難しさを感じるみたいなことですか？

そうですね。

―僕は自分が教員志したのは、大人になっても感動できるというか。感情が動く仕事はないかなって思ってたんですけど。そういう場面はありますか？

それはもちろん。特に普段目立たない子が、活躍したりとかそういう場面が見れることもあるし。そういう時にそういう姿が見られてやっぱりやってよかったなって思うし、人とすごい関われるのはこの仕事の面白いところかなって思ってます。

―いいですね。

最初、違う中学校に勤めてたって話したんですけど。そのとき新型コロナウィルスの最中だったんですよ。二〇二〇年。

―はい。

一年しかいなかったからそこまでたくさんのができなかったって感じでわなかったんやけれども。去年ちようどその子たち当時受け持ってた子たちが、高三になって文化祭があったんです。いっていいんですけど、だいぶ期間も経ってるし忘れられてるかなとも思ったんやけ

れども。やっぱりいろんな人がすごい声かけてくれて。中二から高三になって、当然もう見た目も雰囲気とか、背がすごく大きくなってたりとか。すごい垢抜けてたりとか。なんかそういうふうな姿が見れたりして、色んな人と関わられたり、喋れたりするって、こういうこともあってやっぱりやってよかったみたいと思う部分もあります。ちなみにR君って知ってますか。印象に残ってますか？

はあ――。ふっふっふ。

―そんな笑います（笑）。

やあーもう。僕が授業に行ったら、「先生今日自習？」って毎回聞いてきて。「今日は進むゆうてるやろ。」って言っていましたね。

―今もめっちゃやんちゃなんですよ。

やっぱり、やっぱり。

―毎回自習にして言うんですか？

もう毎回。「授業するの嫌」とか。

―だから印象に残ってるって感じですか？

一番よく目立つタイプではあったので。近所でもあるんで、ちよくちよく見かけたら、「先生やん、久しぶり」とかも言うてくれますし。

―やっぱり印象に残ってる生徒の一人ですか？

まあ、それはやっぱり。

―どういう生徒が印象に残るんですかね？

前に持った子なんかはいわばちよつと結構怒ったりすることが多くて、でもやっぱり進路のこととかは凄く悩んで、いっぱい話聞いたんやけども。最後、卒業式の日にはクラスの前で一人ずつ話すみたいなシーンがあったんやけども。そのときにボロ泣きして。

―その子ですか？

そうそう。その子は「僕がこんなことがしたいって言っても馬鹿にされることもなかったし、みんなすごくあたたかく接してくれたし。先生もいろんな話聞いてくれてほんまに、ほんまにありがとうございました。」

―感動っすね。

もうー。あれはめっちゃや込み上げてくるものがあつたというか。

―クラスの雰囲気もそんな感じ（感動してる感じ）？

そうですね。たぶんみんな感じるものがあつたんちゃうかなとは思っし。

―そんなクラスが作れるってすごいことだと思うんですけど、クラス作りで意識していることもあるんですか？

いいクラスを作ろうっていう風に、意識はしていたけれども。それが上手に伝わったかどうかは正直、自信はない。でもやっぱりその最後にそういう空気ができたのは一つ良かったところなんじゃないかなと思ってます。みんなクラスの最後、寄せ書きとかに書いてくれたのは明るい集団、明るい雰囲気を作ってくれたみたいなのはいろんな人が書いてくれて。ちよつとでも自分が考えてることが伝わったのかなと思っはいい。

今年も担任して、一番最初クラスに入ったときも、気合い入れすぎで。他の先生から「大井先生のテンションの高さにみんなちよつとビビってたで。」みたいなのを言われて。

―先生がですか？（笑）

そうそう。なんならちよつと引いてたらしくて。別にネガティブには思っていない感じだったんですけど、なるべく最初はやっぱりその熱い想いというか明るく。うん、伝えれるようには考えてるかな。

―それは毎年やってるんですか？

なんか自分はこういうことを、こういうふうに、みんなにこんな風になつてほしいんですよ。みたいなのを具体的に思ってることみたいなのは最初に喋るように。はじめましてのときって「この先生どんな人なんやろう？」って思ってるやろうし。

―はいはい。

多分めっちゃめっちゃ品定めというか、してくれると思うのでそこでちよつとでも興味を持ってもらえるようにと。

―だからか、わからないですけど。先生って最初の時めっちゃ気合入れてんなあつて思うんですけど。

うんうん。

―やっぱり第一印象を大事にされてるんですか？

それは大事。授業の時なんかはやっぱり規律の部分とかはしっかりさせたいみたいなのが最初にあつて。だからむしろちよつと厳しく行ったりはしてます。ただそれでこの人無理みたいに思われたりすることもあるたりして。

―難しいですよ。

例えば、スタディサポートってあるやんか。その試験に遅刻してきた人がいて、はじめましての状態やったんやけど、もう一発目に怒鳴りつけて。今やから言われたのはその自分が担当になるってわかったときめっちゃ嫌やったんすよみたいな（怒鳴られた生徒が）。でも今では定期的に食事に誘ってくれるような間柄になつて。

―最初に怒るのは先生っていう仕事やし、やらなあかんことやからですか？

やっぱり最初にゆるく言ってしまうと、そこから立て直すのって難し

いなくていい。思いとかもあつたりして、なめられないようにっていうのもありますね。だから最初に俺はこういうところはあかんからみたいなのは言うようにしてます。例えばロッカー取りに行くとか俺は絶対に許されへんしとか、プリントなくしたって言っても新しいの渡さへんしとかそういうことを最初に。説明するようにはしてます。

―僕、嫌われっちゃんだろうしとか考えてしまうんですけど考えないですか？

自分も気にするし、多分この子俺のことはあかんのやろうなあと思うことはあつたりするけど。そういうときでも、話を聞いてあげるっていうのが大事かなとは思って。これは教員になつたからっていうよりも、大学生の時塾のバイトをしてたんですよ。そのときに、ほんまに無理みたいに思われたことがあつて。そのときに、その子の周りの人達から信頼を得られたらいんじゃないみたいないアドバイスを受けて。自分も色々あるけれども、相手があかんと思つてるところ（自分の）とかを改善して、それがもし相手にうまい形で伝われば十分やり直せるというか。

―改善しようとするんですね。

まあ、理想は。ただ、へこむのはへこむし。

銭湯と浜崎あゆみ好き

―なんかへこんだときはリフレッシュとかするんですか？

とにかく寝ますね。なんかある程度は嫌なことが忘れられるというか。

―寝るかあ。

後はあんまり大きな声で言えないですけどお酒とか。はつつは。あと

はちよつと、疲れたななんてときには銭湯とか。

―僕もめっちゃ銭湯好きです。サウナとか。

サウナはあんまり入れないですけど、お風呂は入りますね。

―他に趣味みたいなものってあるんですか？

なんか適当に運転して、ぶらっと走ったりとか。それは楽しいですね。

―ドライブか。曲とかも聞くんですか？

かけますね。割といろんな曲、聴きますね。ただ、ちよつと同世代より、もうちよつと上ぐらいの年代の曲が好きだったりするので。

―なんかおすすめの曲ありますか？

小学校の頃から浜崎あゆみが好きで、浜崎あゆみ知ってます？

―聞いたことはあります。

昔からファンで、今でもやっぱり聞いてます。

―また、聞いてみますね。最後に写真撮らなあかんくて、いいですか。

いや、しまったな。髭剃つてこりゃよかった（笑）。

【感想】

自分が将来目指している職業の話が聞けた。自分も大井さんと同じように少し内気な性格なこともあつて、自分と重ね合わせて聞くこともできた。また、教師のやりがいについても知ることができ、自分が将来なりたい教師像が想像できた。さらに、大井さんが大切にしている人の話を聞くことっていうのは、今日から実践して行きたいと感じた。

（次ページへ）

右..語り手 大井峻輔さん
左..聞き手 山林心太朗

